

〔研究論文〕

**教職志望の有無が教育実習に臨む姿勢に与える影響：  
—教育実習ノートの分析から—**

千葉 克裕

〔Article〕

**The Relationship between Intent to Become a Teacher and  
Performance in Practicum Teaching: An Analysis of Practicum  
Teaching Journals**

Katsuhiko CHIBA

**Abstract**

The aim of this study is to clarify whether the presence or absence of intent to become an English teacher affects the quality of a teacher trainee's practicum teaching performance. Around thirty students participate in practicum teaching every year through our department's teaching certificate program. However, many of those students do not have serious intentions to become an English teacher, and their attitude may affect their performance during the three-week practicum. This study analyzed the text data of eight certificate program participants' practicum teaching journals quantitatively and qualitatively. The frequency of words used in reflective entries were almost the same between teacher-to-be students and those with no intention to be a teacher, but substantial differences in perceptions of teaching and attitude toward students were found in qualitative analyses.

**1. はじめに**

国際学部では英語科の教員免許課程を持ち、毎年数十人が中学1種・高校2種（英語）免許を取得している。しかしながら、実際に教壇に立つのは10名程度の学生である。免許取得の大半の学生は教員志望ではないのに免許を取得するために教育実習に参加しているのが現実である。教育実習を受け入れる側の意識として、実習生に最も求めているのは1位が教員志望、2位が教職への熱意と意欲である（山崎, 2006）が、送り出す側としてこの要求は満たしていないことになる。教員養成課程の責任として、教育実習生として備えるべき最低限の資質を養成するのは当然の責務である。

実習生として備えるべき最低限の資質として先ず第1には英語力が挙げられることには議論の余地がない。本学では英語科教育法Ⅳ（3年次秋学期）終了時までにはCASEC600点を単位認定の要件として申し合わせている。第2に教師としての資質であるが、この定義は確立したものはない。前述のように教員志望の意思、教科指導・生徒指導など教職に対する熱意であるがこれらを評価する方法はない。

本研究では、教育実習記録（以下実習ノート）の記述を分析することにより、教員志望の学生と資格取得のみを希望する学生には教育に対する意識の違いがあるのか、また実習期間を通して意

識の変化に違いがあるのかを検証し、教育実習に望むための最低限の資質について考察する。

## 2. 先行研究

これまでも教育実習に関する研究はいくつも見られるが、教育実習日誌そのものを分析した先行研究の数は限られている（永田 2013）。石井（2007）は実習生 1 名の実習日誌を分析し、数学の実習授業における授業観の変容を「授業観察」、「授業案立案」、「反省」の 3 つの段階から分析し、それぞれの時点のどの段階（例えば、導入、発問、まとめ、等）での記述が多いかなど分析し、実習生の課題意識が日誌の分析を通して明確化されると指摘している。また、猪井（2003）は、英語科の実習生 9 名の実習記録の中から英語授業に関する記述のみを分析し、「基本的教科指導技術」、「一般的教科指導技術」の 2 つに分類し指導技術に関する分析を行った。深沢・野澤（1995）は、実習記録の内容が指導過程・生徒観・教材研究・指導技術の 4 観点に分類出来ると指摘し、生徒観に関する記述が少ないと指摘している。山崎（2006）が指摘するように教育実習に望むにあたって重要なことは教職に対する意識に集約出来る。本研究はこれまでの先行研究では、ほとんど焦点が当てられていない教職そのものに対する意識が教育実習中にどのように変化するかについて分析する。

## 3. 研究方法

### 3.1 研究課題

本研究は、教職志望の有無が教育実習に与える影響を検証するために研究課題として以下のリサーチクエスチョンを設定した。

RQ1 実習期間を通して意識の変化が見られるか？

RQ2 教員志望の有無によって意識の違いはあるのか？

### 3.2 被験者

被験者は文教大学国際学部 2016 年度教育実習参加者 8 名の 4 年生である。内訳は教員志望 6 名、民間企業志望が 2 名である。

### 3.3 研究方法

教育実習ノートの 1 日の反省欄の記述をテキストデータとして書き起こし、実習開始 1 週目の 5 日間と実習終了日までの 3 週目、最後の 5 日間を分析対象として質的分析ソフト Nvivo 11 を用いて分析した。実験記録提供者には文書と口頭による説明を行い、文書による同意を得た。

テキストデータの分析では、1) 語彙の出現頻度による実習生の意識の確認を①全被験者を対象に 1 週目 5 日間と 3 週目 5 日間での比較、②教員志望の有無により、それぞれ 1 週目 5 日間と 3 週目 5 日間の分析、2) 反省の記述に対するコーディングを行い、意識がどこに向いているかについてそれぞれ教員志望の有無によって分析した。

## 4. 結果と考察

### 4.1 頻出語のちがいを (全体)

質的分析ソフト Nvivo11 による頻出語クエリにより実習生がどのような語句を用いて反省しているか概観したものが図1 (前半5日間) と図2 (後半5日間) である。前半の最上位の3つは、生徒、授業、先生、後半は、授業、生徒、時間とであり、実習期間を通して生徒と授業に意識の多くが割かれていることが分かる。

図1 実習開始から5日間の頻出語 (全体)



図2 実習終了までの5日間の頻出語 (全体)



#### 4.1.1 1週目 (5日間) : 生徒との関わり

頻出語の頻度と割合の詳細が表1である。教育実習の多くのケースで1週目は授業見学及び担当 HR クラスでの活動となる。緊張感も高く人間関係も出来上がっていないため、生徒との関係についての記述が目立つ。最も高頻度で使われる単語は「生徒」で、5日間で計 1033 回、全体の 4.02%

を占める割合で使われている。第2位は「授業」である。参観した授業についてのコメントが中心となり、指導教員など現役の教師の授業を見る中で気づきについてのコメントが多く見られ、単語の出現総数は916回、3.57%となる。また、3番目に多いのは「先生」という単語であるが（412回、1.60%）、これは教職としての“先生”にたいするコメントというよりは、教科・HRの指導教員に対する「〇〇先生」という呼称として使われているのが圧倒的多数である。

実習開始直後の1週目は、生徒との人間関係の構築に意識が集中し、実際の教育現場の観察から様々な学びを得ていることが示されている。

表1 実習1週目5日間と3週目5日間の頻出語内訳

第1週5日間			第3週目5日間		
使用語	カウント	重み付けパーセンテージ (%)	使用語	カウント	重み付けパーセンテージ (%)
生徒	1033	4.02	授業	936	3.71
授業	916	3.57	生徒	894	3.54
先生	412	1.60	時間	349	1.38
自分	228	0.89	先生	223	0.88
行う	222	0.86	行う	218	0.86
人	205	0.80	私	217	0.86
時間	202	0.79	自分	186	0.74
感じる	188	0.73	今日	174	0.69
指導	180	0.70	実習	168	0.67
見る	165	0.64	感じる	163	0.65

#### 4.2.2 3週目（5日間）：授業運営（時間配分）と生徒指導

最終週に入ると実習授業の数も多くなり、研究授業の準備と本番に臨むことになるため、授業に対するコメントが多くなり「授業」という語が計936回（3.71%）見られた。英語の授業展開について細かな記述が多く見られ、授業をすることに慣れるにつれて反省と次回への欲のようなものが垣間見られる。また、「生徒」という単語の使用頻度は894回、3.54%と1週目同様かなりの比率を占めるが、その使用場面は1週目の「人間関係としての生徒」に対する言及ではなく、英語またはホームルームなど「授業場面における生徒」に対する指導や関わり方への反省として使用されている例が圧倒的多数となり、ここにも3週間の実習生としての意識の変化が認められる。

#### 4.2 教職志望学生の特徴

本節では、教職志望の有無によって反省の記述に違いが見られるか、つまりは意識の違いが見られるかについて使用語彙の頻度および個別の記述から分析する。

### 4.3.1 頻出語彙「生徒」：教職志望の学生

教職志望の学生は1週目も3週目も生徒に関する記述が圧倒的に多い(表2)。4.2で概観したように1週目は人間関係の構築に関する表現での「生徒」が多く現れる。一方、3週目は授業運営においての「生徒との関係」や「生徒の理解」とその質が変わってきている。以下に事例を挙げて検証する。

表2 教職志望有り 頻出語句まとめ

第1週目 5日間			第3週目 5日間		
使用語	回数	重み付けパーセンテージ (%)	使用語	回数	重み付けパーセンテージ (%)
生徒	859	4.16	生徒	762	3.77
授業	700	3.39	授業	678	3.35
先生	365	1.77	先生	302	1.49
時間	173	0.84	時間	189	0.93
行う	166	0.80	行う	161	0.80
自分	165	0.80	自分	160	0.79

#### 教職志望実習生3の事例

##### 第1週目：

2日目 「掃除ではおしゃべりやふざけ合っている生徒たちにあまり注意ができなかったです。これが私の課題点です。」

4日目 「△△先生のお話にもあったように、『○○くん(さん)、おはよう』というように名前で呼ぶということが生徒の心を開く第一歩なので、明日から意識的に行ってみたいです。」

この他にも「明日は2-3の生徒全員に話しかけるのを目標にし、まず帰宅後生徒の名前を覚えることから始めたいです。」(1日目実習生5)、「初日より、多くの生徒とふれ合う事ができました。」(2日目、実習生4)など、第1週目には人間関係を形成することだけでも大変な状況であり、実習生として関係づくりにエネルギーを割いている様子が分かる。一方、第3週に入ると次のような記述が確認された。

##### 第3週：14日目研究授業

11日目 「生徒が英語に少しでも興味を持っているという現れでもあると思います」実習生3

14日目 「私が緊張していることも感じとっていたようで、本当に生徒に助けられた授業でした。私が3週間で築けた生徒との信頼関係が現れたようにも感じました。」

「明日はいよいよ最終日です。授業もアクティビティなので楽しみながら英語を生徒と学んでいきたいです。」

他の実習生の反省にも、「生徒が三人称単数現在形をきちんと理解できるよう説明に工夫をしました」（実習生1）、「何を聞き取るのか分からなかった生徒が多く、思うようにリスニングが出来ませんでした」（実習生2）、「1つ1つの活動にどんな目的があるのかが生徒たちに伝わっていなかったように思いました」（実習生7）など授業改善への意識が強く表れている記述が数多く見られる。

このように、3週間の授業指導や生徒指導を通して築き上げられた人間関係の基づき授業内の空気が形成され、実習生としては最も緊張と負担を強いられる研究授業を助けられたことに感謝の心を持ち、さらには翌日の最後の授業に対して「楽しみながら生徒と学んでいきたい」というものはや一方的な教授ではなく双方向での学びの場が形成されようとしていることが推察される。

#### 4.3.2 頻出語句「授業」

「授業」という単語は1週目に計700回（3.39%）使われている。教職志望の実習生に共通することは実習2日目の振り返りの中で自分が授業をする場面を想定しての観察と気づきがあることである。以下が2日目の記述からの抜粋である。

実習生1 「来週からの自分の授業に生かせれば」

実習生2 「そのなかでも授業をしなくてはいけないので注意するところはしっかりと注意することが大事」

実習生4 「こんなことを言ってくれる生徒のために下手な授業はできないと思う気持ちが急激に増した」

実習生7 「自分が授業を行う際にも、こうした生徒同士が協力し合って学習する場を作りたいと思いました」

実習生5 「同じ授業を3クラス分行っていましたが、すべてが同じなわけではなく、クラスの能力や性格に合わせてどこまで教えるか、またどこまで充てるかなど決められているようで、勉強になりました」

3週目の5日間は実習授業の回数も増え研究授業での反省などが多くなる。以下抜粋。

実習生1 11日目

「楽しく英語を使える、そんな授業をつくっていく事が私の現在の課題です。」

実習生3

11日目 「今度は授業の中でも気軽に質問できる雰囲気を作って、授業中に疑問を解決できるよう工夫したいです。」

12日目 「もし苦手な教科の問題をいきなり解くよう指示されても、初めから拒否反応を起こしてしまいます。もう少し生徒目線に立って授業を練りたいと思います。」

実習生4 14日目

「今日の授業では、生徒の注意を引くことができなかった。…中略…あとは生徒をほめること。仮にうまくできなくても good job! と何かしらの声を掛けてあげること。」

このように授業への主体的、前向きな反省が多くなり、「教師」としての目線が形成されつつあることが推察される。後述するが、教員を志望しない学生も授業という語句の使用割合に大きな差

はないが、授業する立場に対しての記述の割合は少ない。

#### 4.4 教職を志望しない実習生

本節では民間企業への就職を希望している学生の記述について考察する。(表3)

表3 教員志望の実習生 第1週目および第3週目の語彙頻度

第1週目 5日間			第3週目 5日間		
使用語	回数	重み付けパーセンテージ (%)	使用語	回数	重み付けパーセンテージ (%)
生徒	407	4.07	授業	374	3.8
授業	385	3.85	生徒	320	3.26
先生	159	1.59	自分	108	1.1
自分	106	1.06	行う	106	1.08
行う	106	1.06	先生	97	0.99
考える	83	0.83	感じる	92	0.94

##### 4.4.1 頻出語句「生徒」

教員を志望しない実習生2名の記述を分析すると、「生徒」という単語は1週目の5日間で計407回使用されている。重みづけパーセンテージは4.07%であり教職志望の学生と大きな差はない。また、教職志望学生との違いは、3週目の5日間では「授業」が1位となり「生徒」の出現割合は3.26%の2位となっている。以下に特徴的な記述を抜粋し考察する。

実習生6

第1週 4日目

「本日は2年2組と2年4組の英語の授業を見学させていただきました。

2年2組は過去進行形の学習を行っており、ALTと先生との会話を通して「いつの話をしてたか」生徒に問いかけていました。昨日のある時点で自分がしていたことは何であったか生徒にたずねさせ、先生がyes/noで答えることで過去進行形の疑問文やその答え方をALTやペアワークでの会話を通してインプットさせていました。」

実習生8

第1週 3日目

「今日、行ったことは、大きく3つある。「朝礼/終礼」、「石井先生の授業見学」、「授業準備」である。「朝礼/終礼」では、その活動その活動でキッチンと区切りを作る必要があると感じた。今日、区切りを作れなかったために、少し騒がしくなってしまった。生徒がその場その場で今、何をすべきか分からなかった、またメリハリがついていなかったことが原因だと思う。」

これら2名の教職を志望していない実習生の1週目5日間の反省の記述はほとんどが上記のような「出来事」の記録にとどまっているのが特徴的である。「生徒」の記述は授業内の生徒の動きの描写にとどまっており、自分との関係という視点からの記述がほとんどみられず、感じたことやどう取り組んでいくべきかという実習生自信の考えに意識を向けることはない。その他の記述を見ても決して不真面目な態度で取り組んでいるわけではないが、教職志望の学生の記述とは性質を異にしている。次に実習が終わる第3週の記述を分析する。

#### 実習生6 第3週 11日目

「反省点は導入の写真提示の際『彼（彼女）が誰か知っていますか？』という英語を言い間違えてしまったこと』…中略…『生徒に当て、S : I think that ～を引き出せたのは良かったが、3単元sの説明を忘れてしまったこと』…でした。」

#### 実習生8 第3週 14日目

「反省としては、3組以外のクラスで授業の終わりに不満を持つ子が出てしまったことである。パートの終わりが明確でない、生徒の中での終わりの形とズレがあるなどが考えられる。またパートでのゴール目標を生徒達に提示していないので理解の落とし所が分からないということも考えられる。」

実習生個人の文章スタイルも多少の影響をあたえていると考えられるが、1週目と同様に客観的な分析にとどまり、自分自身を内省した記述にはいたらないのは、やはり教職に対する意識の違いのためではないかと考えられる。

### 4.4.2 頻出語句「授業」

第1週目の5日間の反省の中で、「授業」という単語は2名合わせて計385回、割合で3.85%と教職志望学生の3.39%より多く言及している。しかし、その記述内容には教職志望の学生が挙げたような「(自分でする) 授業への期待や緊張感」のような表現は全く見られず、指導教員の授業や他教科の授業見学の客観的描写にとどまっている。

### 4.4.3 まとめ

教員志望(6人)と企業志望(2人)の使用語彙の頻度を分析すると、例えば「生徒」に対する記述は、762 : 362とおよそ2対1の割合で出現していて決して低いわけではない。しかし、その内容には主体的取り組みが見られる教職志望の学生に対してあくまでも客観的事実として生徒をとらえる企業志望の学生の姿勢との間に大きな溝が見られた。

## 4.5 コーディングによる質的分析

使用語彙の頻度の比較は量的な分析の側面もあり、実習生として意識の違いを分析するにはいたらないと考えられる。そこで本研究では、実習ノートの文章に対してコーディングを行い、共通する意識の抽出を試みた。表4はコーディングしたノードのまとめである。本稿では、教職志望と企業志望の実習生で比較し、数値に「0」のあった項目、つまり教職を志望しない学生には見られない意識について考察する。



表4 コーディングノード一覧

ノード	A: 教員志望 = あり	B: 教員志望 = なし
1: 緊張	19	2
2: 実習への思い	33	5
3: 楽しさ	4	1
4: 感謝	10	2
5: 寂しさ	4	0
6: 積極性	7	2
7: 不安	3	0
8: 授業	74	20
9: つまづき	7	5
10: 気づき	24	6
11: 指示のしかた	8	0
12: 指示	1	0
13: 指導の難しさ	19	8
14: 時間配分	5	2
15: 授業をする楽しさ	8	0
16: 生徒の理解	2	0
17: 生徒との関わり方	54	3
18: 関わり方の楽しさ	10	1
19: 厳しさ	3	0
20: 成長	12	0
21: 声かけ	9	1
22: 名前を呼ぶ	4	0

#### 4.5.1 実習への思い

3週間を通して実習に対する思いとして分析されたのが表5である。「実習への思い」を大分類とし、その他を下位ノードして分析した。前述のとおり本研究の被験者の比率は3対1であるが、生徒との関わり方についてのコメントの数は33:5と6倍強の開きがある。楽しさや感謝する気持ちの表現にも大きな差がある。教職志望の学生が下記抜粋のように12日目から早くも寂しさの感情を吐露する一方、教職を志望しない実習生は実習への不安も表さない代わりに実習が終わってしまうことへの「寂しさ」もないことが分かる。

コメント抜粋

12 日目

「実習がもうすぐ終わることに少しずつ寂しさを感じるようになりました。」(実習生 7)

13 日目

「2 年生、特に 34 組の生徒との別れはつらい」(実習生 5)

15 日目

「今日でこのクラスとお別れとなると寂しくて仕方ありません」(実習生 4)

「明日から子どもたちに会えないのかという寂しさを感じながら過ごしました」(実習生 7)

表 5 実習への思い

ノード	A: 教員志望 = あり	B: 教員志望 = なし
2: 実習への思い	33	5
3: 楽しさ	4	1
4: 感謝	10	2
5: 寂しさ	4	0
6: 積極性	7	2
7: 不安	3	0

#### 4.5.2 授業について

4.4 で見たとおり、「授業」に対する言及そのものの回数には教職と企業で大きな差はない。しかし、その内面にはかなりの違いがあることが示されている(表 6、「授業」を大分類、以下を下位ノード)。注目すべきは「授業をする楽しさ」についての振り返りが企業希望の実習生には一言もないことである。指導の難しさやつまずきなど、指導技術に関することは同じように反省していても、教職にとって最も大切とも言える授業をする喜びの感情は示していない。

#### 4.5.3 生徒との関わり方

下位分類も含めて生徒との関わり方について反省に記述している数は教職志望と企業就職希望の学生の間で最も差が大きい項目が「生徒との関わり方(大分類)」である(表 7)。実習生の比率が 3 対 1 に対して、生徒との関わり方についてのコメントの数は 54:3 と 8 倍の開きがある。また、「関わりの楽しさ」では 10 対 1、「声かけ」は 9 対 1 である。注目すべきは「生徒の成長」に対するコメント、「名前を呼んでの関係づくり」、そして「生徒に対する厳しさの必要性」の 3 つの項目においては企業への就職を希望する実習生は一度もコメントがないことである。

表6 授業に関する意識

ノード	A: 教員志望 = あり	B: 教員志望 = なし
8: 授業	74	20
9: つまづき	7	5
10: 気づき	24	6
11: 指示のしかた	8	0
12: 指示	1	0
13: 指導の難しさ	19	8
14: 時間配分	5	2
15: 授業をする楽しさ	8	0
16: 生徒の理解	2	0

表7 生徒との関わり方に対する意識

ノード	A: 教員志望 = あり	B: 教員志望 = なし
17: 生徒との関わり方	54	3
18: 関わりの楽しさ	10	1
19: 厳しさ	3	0
20: 成長	12	0
21: 声かけ	9	1
22: 名前を呼ぶ	4	0

## 5. まとめ

今回の教育実習ノートの分析によって、教員志望の学生と教員を志望していない学生の反省記録の中で使われる表現（語句の頻度）には大きな違いがないことが明らかになった。これは、例え免許取得のみの学生であっても実習において学ぶべき事柄については理解しており、それなりに誠実な態度で臨んでいるということが言えよう。しかしながら、その詳細を分析すると真に教員を志している学生とそうではない学生の間には関心の向いている方向（実習に対する意識）には大きな違いがあることが確認された。授業参観で同じように「生徒」や「授業」について学んでも、片や自分が授業をする際の状況を思い浮かべて気づきや感想を述べ、生徒の目線で出来事を捉えようとする一方で企業への就職を希望する学生は客観的事実の把握と教職のテキストで学んだ知識による分析に留まっている。

詳細なコーディングの結果分かったことは、「生徒との関わり方」に関する意識の違いが大きい

ことである。1週目と3週目の合計10日間の振り返りの中で、教員志望の学生が54ヶ所にわたり言及するなか、非教員志望の学生はわずか3ヶ所の記述しかない。また「授業をするたのしさ」や「生徒の成長」について全く言及がないことも発見の1つである。今回の研究は定量的には8人という少ない被験者の数であり、この数値を持って一般化することは難しい反面質的分析として意識の違いを浮き彫りに出来たことは一定の成果と考える。教員を志望しない学生が真面目に教育実習に参加しても、真剣に教員を志望している学生の意識、姿勢、態度とは大きな違いがあり、その学生たちが接する「本物の生徒」たちが受ける「実習授業」や「生徒指導」により与える影響を鑑みる時、教育実習に送り出す側としての責任を改めて認識し、教職課程のカリキュラムや実習の参加資格(英語力だけでなく)について検討続ける必要がある。

本研究は教育実習ノートのテキストデータのみ分析を行ったが、今後の課題として事前・事後のアンケートやインタビューなどより詳細な質的分析を行い、教育実習生に必要な(欠けている)資質についてさらに検証する必要がある。

## 参考文献

- 石井勉 (2007) 「数学科の教育実習生の変容に関する考察—日誌を基にした分析とその限界—」  
東京学芸大学附属学校研究紀要第34集 pp.69-81
- 猪井新一 (2003) 「英語科教育実習日誌の分析」 東北英語教育学会研究紀要 第23号 pp.45-54
- 深沢清治・野澤久美 (1995) 「英語科教育実習における Diary Studies の試み」 昼島田医学学校教育部紀要 第17巻 pp.47-53
- 永田孝夫 (2012) 「教育実習における授業実習の現状と改善—『教育実習記録』から実習生の授業実習を分析する—」 愛知教育大学教職課程研究年報 第2号 pp.69-82
- 山崎朝子 (2006) 「英語教職課程の現状と課題」 武蔵工業大学環境情報学部紀要 No.7 pp.103-112